

評価報告概要表

■第三者評価機関

名 称	社会福祉法人 山口県社会福祉協議会
評価調査日	平成23年10月18日(火)

■福祉サービス事業者情報

名 称	華南園	種 別	障害者支援施設
代表者氏名	施設長 平本信之	開設年月日	昭和48年7月1日
設置者	社会福祉法人 山口県社会福祉事業団	定員(利用人数)	50人(50人)
所在地	〒747-0833 防府市大字浜方中浜205		
電話番号	0835-23-3650	FAX番号	0835-23-3623
ホームページアドレス	http://jigyodan-vg.jp/kanan/		

■総 評

全体を通して(事業所の優れている点、独自に工夫している点など)

◇特に評価の高い点

- ①その人らしさを大切に」の基本理念を職員一同が明確に把握しており、利用者一人ひとりの人権を尊重した中期計画を根幹として、前年度の事業評価を次年度事業計画に生かし、利用者本位で質の高いサービスの提供を目指している。その手法として、PDCAサイクルの有効活用が十分なされています。
- ②サービス改善検討委員会の他6つの委員会を組織し、施設全体でサービス提供の強化を図っています。
- ③人事管理においては、課長・主任には人事考課を取り入れ、一般職には試行的に実施しています。
- ④生活介護事業の定員枠を増員し、地域の障害者へのサービスを積極的に行うとともに、施設の利用者と入所者の交流を図っています。
- ⑤利用者との時間や会話を重視している。毎月、利用者の自治会の「話し合おう会」を開催するとともに、年1回利用者満足度調査を実施し、サービス提供の改善に反映させています。
- ⑥年に2回自己点検評価を行ない、さらに3年ごとの第三者評価を受審することにより利用者へのサービスの総点検が十分になされています。

◇改善を求められる点

- ①平成21年度より旧体系の療護施設から新体系へ事業移行し、2年半を経過しているが、今後、さらなる職員の意識改革が期待されます。
- ②利用者が、日中に他事業所など複数の事業所が利用できる等、より要望に近づいたサービス提供のためのシステム構築と、その活用のあり方の検討を望みます。
- ③現在の限られた利用者居室の工夫は見られるが、個室化の推進を図る必要性があります。

■第三者評価結果に対する事業者のコメント・事業所のPR

本園は、昭和48年7月に県下で最初に設置された県立身体障害者療護施設ですが、平成23年4月、山口県から移管され、山口県社会福祉事業団の一施設として、新たなスタートをきりました。
この節目にあたり、さらなる飛躍・発展を目指して第三者評価を受審いたしました。個々の「a」評価に甘んじることなく改善すべきところは改善し、より良質な利用者本位の福祉サービスの提供に努めるとともに、相談支援事業所の開設など在宅福祉の充実にも積極的に取り組み、地域福祉の中核的な担い手として、引き続き地域福祉の向上に貢献していきたいと考えています。

評価報告概要表

■評価分野別評価結果(分野別の特記事項)

I 福祉サービスの基本方針と組織	a	12	b	0	c	0	Na	0
<p>利用者一人ひとりの人権を尊重した「その人らしさを大切に」の基本理念を職員が明確に理解し、中期計画を熟考し、利用者本位で質の高いサービス提供を施設長はじめ職員が、目指していることが伝わってきました。</p> <p>特に、サービス改善検討委員会の他6委員会を組織し、サービス提供の質の向上に向けた取り組みを研修会で重ねるとともに、利用者毎月1回行う「話し合おう会」や状況に応じて個別面談で、よりきめ細かく丁寧に利用者の立場に立った総合的な支援を行なうという基本姿勢が浸透している姿が随所に見受けられました。</p>								
II 組織の運営管理	a	21	b	0	c	1	Na	0
<p>今年度、県から移管し実質的な自立経営に移行した。収入・支出の状況を分析し、エコ対策を取り入れ、光熱水費やその他のコスト削減意識が、職員に周知徹底されていました。</p> <p>人事管理面では、今年度は人事考課を課長・主任に取り入れ、一般職には試行的に実施しています。</p> <p>また、法人としてはメンタル相談助成制度や資格取得等助成制度を整備し、職員には昨年度以上にスキルアップし、向上心が育まれ、より働きやすい環境に視点を置いた運営がなされていました。</p> <p>さらに、地域との連携も強化し、ボランティアの方々による支援も多岐にわたり、利用者の日中活動のプログラムがバラエティに計画されている。地域の要望に応えるために、12月より相談支援事業も開始する予定です。</p>								
III 適切な福祉サービスの実施	a	22	b	0	c	0	Na	0
<p>人権擁護委員会で、呼称・言葉づかい等、接遇に係る研修会を実施した。研修会の後に禁句集を作成し、利用者本位の視点に基づいたサービス提供がなされていた。また、年に1回利用者満足度調査を実施するとともに、毎月「話し合おう会」を開催し、利用者がどの職員とも話しやすい環境であり、相談できるシステムを構築しています。</p> <p>さらに、意見・要望を掌握し、サービス改善検討委員会でよりよいサービス提供の向上に向け、取り組んでいます。</p> <p>また、日中活動委員会では、日中活動メニューの改善もなされており、利用者の希望の多い外出・外食を個別支援計画に盛り込み、全員が参加できる工夫が見られました。</p> <p>また、福祉台帳システムによるサービス提供の可視化と記録整備の簡素化を図り、情報がリアルタイムに共有できるシステムも有効活用していました。</p> <p>全体的にサービスの質は申し分ないが、個別支援計画の視点として、生活介護事業と施設入所支援事業の2つの角度から利用者のニーズを中心に支援計画を検討していました。</p> <p>平成21年度に、旧体系から事業移行をした経緯をもう少し踏まえた職員の新たな視点の変革も必要であると思います。</p>								
IV 良質な個別サービスの実施	a	29	b	2	c	0	Na	3
<p>利用者支援として、言語障害のある方にもじっくりと寄り添い、状況や思いを受けとめ、理解を深める実践をしていました。</p> <p>日中活動は、利用者の要望から各種準備し、利用者の選択が可能となっていました。</p> <p>家族との連携については、保護者会総会や事業所行事の秋華祭を開催し、園の行事に参加して頂き、その際にサービス内容や活動等を知らせ、家族からの相談にも応じている。日常生活支援では、食事は調理方法を障害に合わせ、きざみ食やミキサー食等工夫し、スプーンやフォークなどの自助具も利用者一人ひとりの状況に合わせて細かい配慮をして作られていました。</p> <p>さらに、食事時間に幅をもたせたことで、ゆったりと食事を楽しみながらの食事介助ができていました。</p> <p>入浴も可能な曜日を増やしゆったりと楽しむことができるようそのためのスタッフも増員されていました。</p> <p>地域生活への移行については、生活介護事業の定員枠を5名増員し、現在8名が登録している。こうして、利用者間に、地域で生活する障害者との交流も生まれ、施設から地域参加へと利用者自らの視点が広がり貴重な視点が育まれています。</p> <p>その内容の一つには、住まいは華南園で、日中活動は曜日ごとに他事業所を利用する事例も増加してくると、地域生活への移行の一つのモデルとなってくると考えられます。</p> <p>外出についても自力で、他者との交渉や交流ができるよう段階的にチャレンジする機会を設け、地域に出ていくエンパワメント力の発掘を職員が温かく見守っていました。</p> <p>全体的に利用者が一日をゆったりと自然体で時間が流れているように感じ、利用者同士も職員同士もあたたかい雰囲気になっていて、好印象でした。</p>								